＜後期オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――古代から宗教改革

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生を対象にしている。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．内容

本講義では、前期後期ともに、まず、10 回程度の講義を行い、残り 5 回の授業において、受講者の研究発表を実施する。キリスト教学専修学部生（研究生も含めて）に対しては、この研究発表によって、卒論指導を行う。

今年度の前期のテーマは、近代キリスト教思想研究である。今年度は、18 世紀以降の近代的知との関わりにおけるキリスト教思想の展開、特に、近代聖書学の形成と発展を中心に、現在の研究状況を概説する。合わせて、近代宗教批判ついても論じる。

後期のテーマは、現代の聖書学（旧約と新約）の諸問題について、具体的な聖書テキストを取り上げながら、解説を行う。創造論、一神教概念、契約思想、神殿神学、預言、知恵文学（ヨブ記）、終末論、史的イエス、奇跡物語、イエスの譬え、ルカ的救済史、初期キリスト教と女性、パウロの人間論、政治神学などを論じる。

Ｄ．確認事項

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（一部、レポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（月３・４）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

前期：キリスト教と近代的知――聖書学と宗教批判

オリエンテーション――キリスト教と近代的知	4/13
１．西欧近代とキリスト教	4/20
２．啓蒙主義と理神論	4/27
３．近代的知と自然主義	5/11
４．近代的知と歴史主義	5/18
５．近代聖書学の成立とその諸原理	5/25
６．近代聖書学の諸帰結	6/1
７．宗教批判１――フォイエルバッハ・フロイト	6/8
８．宗教批判２――マルクス・キルケゴール	6/15
９．宗教批判３――ニーチェ	6/22
１０－１４．研究発表	6/29 ～ 7/27

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション　10/5
１．創造論　10/12
２．一神教　10/19
３．契約思想　10/26
４．神殿神学・知恵文学　11/2
５．預言　11/9
６．研究発表　11/16
７．研究発表　11/30
８．研究発表　12/7
９．研究発表　12/14
１０．研究発表　12/21
（１１．研究発表　1/4）
１２．終末論・史的イエス　1/11
１３．イエスの譬え　1/18
１４．初期キリスト教と女性　1/25
１５．パウロと政治神学　→　火曜日の「聖書演習」へ

＜導入：前期から後期へ――近代世界と近代聖書学＞

（１）近代聖書学の成立

１．近代世界と宗教の私事化

宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立は、17 世紀から 18 世紀の至る過程で、「政教分離」システムを生み出した。これは、信教の自由（宗教的寛容）を可能にし、近代市民社会の秩序を安定化させるのに重要な役割を演じるようになる。もちろん、「政教分離」の実態は、国によって大きく異なるが。

しかし、これは公共の領域を私的な事柄（宗教、道徳、経済）の対立から切り離すことによって、宗教を私的なものとして位置付けることを帰結した（私事化）。政治や公教育からの宗教の撤退であり、近代科学の宗教からの自立は、この宗教の私事化に対応した動向であったと言える。

２．歴史主義と自然主義

以上の近代的知は、知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化を生じた。それは、自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱である。

３．近代聖書学

近代聖書学は、17 世紀あるいは 18 世紀から次第に形成された聖書解釈の近代的方法論であるが、19 世紀になると近代歴史学の成立とも連関しながら、一つの学問としての基盤を確立することになる。これは、近代的知に適合した聖書解釈の方法論であり、キリスト教の近代世界への適合の所産と位置付けることができる。19 世紀以降、キリスト教思想には、近代的知への適応という傾向が顕著に見られるようになる。

自由主義神学、宗教史学派

４．近代聖書学の方法論―歴史的批判的方法―

近代聖書学の方法論の前提については、トレルチの古典的な研究があり、またこのトレルチの議論は、パネンベルクによって、「方法的な人間中心主義」として展開されている。

「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む

「類比の適用」に基づき、また、歴史には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」（パネンベルク、54頁）

近代歴史学を支える資料批判は歴史家が属する近代的人間の経験との類推に基づいており（資料の信憑性は機械的な原則の適用に止まらず、歴史家が類推的に評価するを必要とする）、この類推が成り立つには、歴史的現象がすべて相互作用で結びつくことによって、原理的な同質性を有しているということを前提とする。歴史研究は、解釈者としての歴史家の現在を類推の起点とせざるを得ない。この解釈学的構造を、パネンベルクは、「方法的な現在中心主義」と呼んでいる。これは、近代聖書学の特徴を規定すると同時に、近代的知の基本構造に他ならない。

（２）近代聖書学の帰結

５．近代聖書学は、19 世紀以降のキリスト教思想全般に大きな影響を及ぼすことになる。当初は、「イエス伝」研究に見られるように、聖書学的な学的方法論によって、イエスについての歴史的事実を確定し、信仰に基礎を与えることも目ざされたが、しだいにその否定的な帰結が明らかになって行き、その問題点も意識されるようになった。

とくに、問題なのは、伝統的なキリスト教信仰と聖書学的成果との齟齬である。

６．聖書学的歴史学的な方法論と結びついた自由主義神学において、神学の議論は形而上学的な問題設定を離れ、神の問題を倫理との関わりで論じる傾向が顕著になる（神学の倫理化）。しかもそれは、市民社会の倫理との適合を目ざすものであった。フォイエルバッハが、「神学の秘密は人間学である」と論じた事態である。

７．以上の 19 世紀の動向に対する批判は、伝統主義的で保守的キリスト教――古くは敬虔主義やメソディスト運動、そして現代のキリスト教原理主義に至る反近代の系譜――からはもちろん、他にも様々な仕方で現れた。

・ヴァイス、シュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見

聖書学自体が、イエスの宗教思想と近代との相違を明確化し、市民社会の倫理の教師イエスという自由主義神学的な見方の限界を明らかにした。

・第一世界大戦後に、人間学化した神学を超えて、キリスト教神学固有の基礎を目指す弁証法神学の運動が開始された。ここに、神学は「現代」の状況に移行したと言える。

８．歴史学的なイエス研究の限界

シュヴァイツァーからブルトマン

（３）イエス研究の現在

９．現代聖書学の動向から

先に、１９８０年代以降、現代聖書学における新しい動向を指摘した。つまり、２０世紀の聖書学のパラダイム（研究者のコンセンサス）である、「イエスの神の国＝黙示的終末論」という図式の解体である。それによって、現在「イエスの神の国」理解をめぐっては、様々な議論が展開されている。その内の有力な一つの学説が、「知恵の教師イエス」論である。

10．知恵の教師イエス

キリスト教に限らず、宗教思想において、知恵思想は中心的な思想の一つである。それは、旧約聖書における知恵文学の存在が示すとおりである――聖書の知恵文学は、古

代ユダヤ社会の置かれた国際状況を反映しているが、伝統的な共同体の知恵という面と国際的グローバルな知恵という面とを有している（後期の講義を参照）――。

クロッサンが指摘するように、知恵には、慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）の二つの類型が存在するが、イエスの宗教運動に顕著な知恵思想は、転換的知恵と言える。

慣習的知恵：「父祖の知恵」、伝統的社会の中でそのメンバーとして適切に（＝幸福に）生きるための知恵。共同体の秩序を前提とする。因果応報説はその中心。

→　イデオロギー

転換的知恵：古い秩序を転換し、罪の秩序に対して人間性の回復を可能にする新しい秩序のヴィジョンをもたらす知恵。既存の秩序を批判的に相対化する。安息日批判などはその典型。

→　ユートピア、既存の秩序における既得権者＝権力から見て危険思想

→　十字架

11. 知恵から終末論を再解釈する

転換的知恵の思想から、「神の国」を理解することができるとすれば、人間性の回復を可能にする新しい秩序についての知恵という観点から、終末思想をその一つの表現形態として位置付けることが必要になる。知恵と終末との関係理解が、現代聖書学の中心問題の一つといえる。

＜参考文献＞

１．トレルチ　「神学における歴史的方法と教義的方法とについて」（『トレルチ著作集』２、ヨルダン社）
『歴史主義とその諸問題　上中下』（『トレルチ著作集』５、６、７）
『歴史主義とその克服』理想社。

２．パネンベルク　「救済の出来事と歴史」（『組織神学の根本問題』所収、日本基督教団出版局）

３．イッガース　『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。

４．ブルトマン　『歴史と終末論』岩波書店、『イエス』未来社。

５．ノーマン・ペリン　『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館

６．M.J.ボーグ　『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館

７．ジョン・ドミニク・クロッサン
『イエス――あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社

８．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社